

## 甲状腺機能低下症

英語名：Hypothyroidism

同義語：なし

### A. 患者の皆様へ



ここでご紹介している副作用は、まれなもので、必ず起こるものではありません。副作用は気づかずに放置していると重くなり健康に影響を及ぼすことがあるので、早めに「気づいて」対処することが大切です。そこで、より安全な治療を行う上でも、本マニュアルを参考に、患者さんご自身、またはご家族に副作用の黄色信号として（副作用の初期症状）があることを知っていただき、気づいたら医師又は薬剤師に連絡してください。

血液中の<sup>こうじょうせん</sup>甲状腺ホルモン濃度が低くなり、身体の新陳代謝（<sup>しんちんたいしゃ</sup>エネルギー代謝）が悪くなり、体を動かしたり考えたりすることが鈍くなる甲状腺機能低下症が、ヨード含有医薬品、リチウム製剤、インターフェロン製剤などの医薬品によって引き起こされる場合もあります。また、甲状腺ホルモン製剤服用中に他のお薬を服用することでおこる場合もあります。何らかのお薬を服用していて、次のような症状が見られた場合には、放置せずに医師・薬剤師に連絡してください。

「前頸部の腫れ」、「元気がない」、「疲れやすい」、「まぶたが腫れぼったい」、「寒がり」、「体重増加」、「動作がおそい」、「いつも眠たい」、「物覚えが悪い」、「便秘」、「かすれ声」※

※ 医薬品によっては、甲状腺ホルモンの過剰な症状《脈が速い、心臓がドキドキする、体重減少、手のふるえ、汗をかき易いなど》に引き続いて、甲状腺機能低下症が起こる場合があります。

## 1. 甲状腺機能低下症とは？

甲状腺機能低下症とは、身体の新陳代謝（エネルギー代謝）を活発にする甲状腺ホルモンの血中濃度が低下した場合におきます。原因としては、甲状腺からの甲状腺ホルモンの産生と分泌（放出）が低下した場合、下垂体からの甲状腺刺激ホルモンの分泌が抑制された場合、甲状腺ホルモンの代謝（分解）が促進された場合、また甲状腺ホルモン製剤を服用中の患者さんでは、一緒に服用する薬剤によりホルモン補充の必要量が増加する場合などにより甲状腺機能低下症になることがあります。

また特殊な場合として、破壊性甲状腺炎（甲状腺ホルモンをつくる甲状腺濾胞細胞の破壊が起き、蓄えられていた甲状腺ホルモンが血中に多量に漏れ出し、一過性の甲状腺ホルモン過剰症状に引き続き、甲状腺ホルモンが十分に産生されるまで、一時的に甲状腺ホルモンの不足状態が起きる）により、甲状腺機能低下症が現れることがあります。

## 2. 早期発見と早期対応のポイント

血液中の甲状腺ホルモン濃度が低くなり、身体の新陳（エネルギー）代謝が悪くなる甲状腺機能低下症では、「甲状腺腫（前頸部の腫れ）」、「やる気がおこらない」、「疲れやすい」、「まぶたが腫れぼったい」、「寒がり」、「体重増加」、「動作がおそい」、「いつも眠たい」、「物覚えが悪い」、「便秘」、「かすれ声」などの症状が現れたりします。小児では、学業不振（学校の成績が悪くなる）、身長伸びの停滞などが認められることもあります。女性では、月経過多が現れる場合があります。

主に、ヨード剤、ヨード含有薬剤（アミオダロン、ヨード含有造影剤や含嗽剤など）、リチウム製剤、インターフェロン製剤などで起こることがあります。また、甲状腺ホルモン剤と抗てんかん薬などを併用している患者さんにおいては、抗てんかん薬の種類によって、甲状腺ホルモン剤の吸収を悪くしたり、甲状腺ホルモン剤の代謝（分解）を促進したりして、症状が現れる場合があります。

上記のような症状が見られた場合には、放置せずに医師・薬剤師に連絡してください。

医療機関を受診する場合は、服用している医薬品の種類、量、期間など、また、常用している健康食品、サプリメントなどについても知らせてください。

※ 医薬品によっては、甲状腺ホルモンの過剰な症状《脈が速い、心臓がドキドキする、体重減少、手のふるえ、汗をかき易いなど》に引き続いて、甲状腺機能低下症（上記症状）が起こる場合があります。



※ 医薬品の販売名、添付文書の内容等を知りたい時は、独立行政法人医薬品医療機器総合機構の医薬品医療機器情報提供ホームページの、「添付文書情報」から検索することが出来ます。(http://www.info.pmda.go.jp/)  
また、薬の副作用により被害を受けた方への救済制度については、独立行政法人医薬品医療機器総合機構のホームページの「健康被害救済制度」に掲載されています。(http://www.pmda.go.jp/index.html)